

ガリシア・アストゥリアス語の言語帰属問題を巡って¹

川上 茂信

1. はじめに

本稿の目的は、スペイン北部アストゥリアス自治州西部で話されているガリシア・アストゥリアス語の言語帰属問題を概観し、論点を整理することにある。最初にガリシア・アストゥリアス語について簡単に述べ、次にこれがガリシア語の変種であるという伝統的な見方を概観し、それから連続体の考えに基づいて言語圏 (dominio) 間の境界の存在 (ガリシア・アストゥリアス語がガリシア語圏に含まれること) を疑問視する説と、連続体の概念と境界の概念を両立させ (ガリシア語圏に含ませ) ようとする説を検討する。

2. ガリシア・アストゥリアス語とは

アストゥリアス自治州は、スペイン北部に位置し、北はカンタブリア海に面し、西はガリシア州、東はカンタブリア州、南はカスティーリャ・イ・レオン州と境を接している。自治州レベルでの公用語は存在しないが、1981年制定の自治憲章において「バブレ (bable)」が保護と振興の対象とされた (第4条)。1999年の自治憲章改正に際し、バブレの保護・使用・振興を州法によって規定するという条文が追加された (第4条第2項)。ここで言及されている法律は1998年の「バブレ／アストゥリアス語の使用と振興に関する法律 (LEY 1/1998, de 23 de marzo, de uso y promoción del bable/asturiano)」 (以下「言語法」) である²。ここでは「バブレ／アストゥリアス語 (bable/asturiano)」がアストゥリアスの伝統的な言語 (lengua tradicional) とされ、保護・振興の対象となっている (第1条)³。また、第2条では「ガリシア／アストゥリアス語 (gallego/asturiano)」について、それが固有の言語様態であ

¹ 本稿は東京外国語大学特別研修 (2012年度) による研究成果の一部である。研修期間中サンティアゴ・デ・コンポステーラ大学での研究を可能にしてくれた Tomás Jiménez Juliá, ガリシア語に関する疑問を解決してくれた Xosé Luís Regueira, ガリシア・アストゥリアス語研究に取り組む手助けをしてくれた Xoán Babarro González, そしてナビア・エオの存在を教えてくれた Pilar Lago Mediante の諸氏に感謝したい。Este artículo es un fruto de la investigación que llevé a cabo en Santiago de Compostela desde abril hasta septiembre de 2012, durante el permiso otorgado por la Universidad de Estudios Extranjeros de Tokio. Va aquí mi agradecimiento a Tomás Jiménez Juliá, que me ayudó a realizar mi estudio en la USC; a Xosé Luís Regueira, que resolvió con suma amabilidad mis dudas sobre la lengua gallega; a Xoán Babarro González, que me ayudó moral y científicamente a abordar este espinoso tema; y, sobre todo, a Pilar Lago Mediante, que me invitó a conocer un rincón tan guapo donde se habla gallego-asturiano.

² 解説と日本語訳は萩尾 (2005) を参照。

³ «El bable/asturiano, como lengua tradicional de Asturias, gozará de protección. El Principado de Asturias promoverá su uso, difusión y enseñanza».

る地域において、バブレ／アストゥリアス語と同様に同法の規定が適用されるとしている⁴。「ガリシア／アストゥリアス語」は自治憲章では言及されていないことから、またアストゥリアスの伝統的な言語と見なされていないことから、「バブレ」とは異なる位置づけがされていることが分かる。以下、言語法の「バブレ／アストゥリアス語」はアストゥリアス語 (asturiano) と、「ガリシア／アストゥリアス語」はガリシア・アストゥリアス語 (gallego-asturiano) と呼ぶことにする⁵。

さて、本稿のテーマであるガリシア・アストゥリアス語は、アストゥリアスの西部、ガリシア州との境界に近い地域で話されている言語である。州境と重なる部分の多いエオ川と、この地域の東端に近いナビア川の名をとってナビア・エオ (Navia-Eo あるいはエオ・ナビア Eo-Navia) 地域と呼ぶこともある。この地域の人口は約 40000 人で、州全体の 4 パーセント程度である (Academia de la Llingua Asturiana (ALLA), 2006: 9)。話者自身による言語名称としては *fala* という呼称 (33%) が多く⁶、ガリシア・アストゥリアス語 (24.7%) がそれに続く。アストゥリアス語あるいはバブレ (21.4%) と認識する人も少なくない (Llera Ramo & San Martín Antuña, 2003: 87)。他に新造語の「エオナビア語 (eonaviego)」が使われることもある。また、単に「アストゥリアスのガリシア語 (gallego de Asturias)」と言う人もいる。日本では浅香 (2006) による紹介がある⁷。

3. スペイン文献学におけるガリシア・アストゥリアス語

3.1. Menéndez Pidal

3.1.1. ガリシア語とアストゥリアス語の境界

この問題を論じる際にまず参照されるのは Menéndez Pidal (2006) である⁸。これはレオン方言を扱った論文だが、その地理的広がりを確定するために、西側の境界について次のように述べている。

⁴ «El régimen de protección, respeto, tutela y desarrollo establecido en esta Ley para el bable/asturiano se extenderá, mediante regulación especial al gallego/asturiano en las zonas en las que tiene carácter de modalidad lingüística propia».

⁵ なお、言語法でこれら 2 言語の名称に使われているスラッシュの意味は明瞭ではなく、言語帰属に関して複数の解釈を許す。

⁶ *Fala* は、単に「話すこと」、そこから特定の「土地の言葉」、「方言」を意味する。つまり本来はガリシア・アストゥリアス語を他の言語から差異化した言語名とは言い難い。なお、*fala* はポルトガル語、ガリシア語、アストゥリアス語に共通した語形で、カスティール語の *habla* に対応する。

⁷ ただし、言語帰属問題に関する立場を「ガリシア語のブロックの一つ」「ガリシア語領域の一部」「アストゥリアス語」「東部ガリシア語」に 4 分する記述は要領を得ない (浅香 2006: 194–5)

⁸ オリジナルは 1906 年。

Por el Occidente, el límite del leonés no coincide con el del antiguo reino de León, ya que éste abarcó también á Galicia y Portugal; tampoco coincide, ni mucho menos, con los límites de las provincias gallegas y del reino de Portugal. A pesar de que la frontera del dialecto leonés con el gallego-portugués es bien precisa (á diferencia de la frontera oriental), está poco estudiada y mal conocida; es preciso ir marcando una línea que pase por entre pueblos vecinos, de los cuales los de Occidente no diptonguen la *õ* y *ẽ* latinas, diciendo: *corpo terra* y los de Oriente las diptonguen, diciendo: *cuerpo tierra*, (130 / 30)⁹

ここで確認されていることは、まずレオン方言の境界が、ポルトガルやガリシアを含んでいたかつてのレオン王国の境界と一致しないこと、またアストゥリアスとガリシアの境とも一致しないことである¹⁰。興味深いのは、レオン方言とガリシア・ポルトガル語との境界は明確であるという言明だ。ただし研究が進んでいないので、よく分かっていないというのだが、これは、Menéndez Pidal がこの2言語（あるいは方言）の境界をラテン語の短い *õ* と *ẽ* が二重母音化したか否かで判断しているためで、二重母音化していれば (*cuerpo, tierra*) レオン方言、していなければ (*corpo, terra*) ガリシア語という形で境界ははっきりしているが、調査が行き届いていないので、現実の境界線がどこを通過しているか不明なところがあるということだ。

その上で、当時判明しているデータから次のように述べている。

En Asturias, junto al mar, el dialecto leonés no empieza sino á la derecha del río Navia; á la izquierda del río se habla hoy una variedad del gallego de Lugo, y aun en algunos pueblos inmediatos á la orilla derecha (130 / 30).

ナビア川より西ではルーゴのガリシア語の変種が話されており、さらには、川の東側約8キロまでガリシア語が広がっているとしている (131 / 31)。

さて、この地域のガリシア語について Menéndez Pidal は注において次の指摘もしている。まず「ガリシア語的要素」としてラテン語母音間の *-n-* の消失がある。例として *chao* (カスティージャ語 *llano*)¹¹ などを挙げている。また、ガリシア語よりも消失の度合いが大き

⁹ ページの参照は (オリジナル / 2006 年版) の形で行う。

¹⁰ Menéndez Pidal を始め、スペイン文献学の伝統で「レオン方言 (dialecto leonés)」と呼ばれている言語は、現在では「アストゥル・レオン語 (*lengua astur-leonesa*)」などと呼ばれることが多い。なお、アストゥル・レオン語の領域は現在のアストゥリアス、カスティージャ・イ・レオン、エストレマドゥーラ各自治州とポルトガルのミランダ地方にまたがっているが、アストゥリアスに限定してアストゥリアス語という名称も使われる。

¹¹ Chao < PLANU. 現代の標準ガリシア語では *chan* だが、これはガリシア西部の形で、*chao* はガリシア中央部以東、アストゥリアスにまで広がっている (Instituto da Lingua Galega (ILGa), 1995: mapa 35). ラテン語 *-ANU* の結果については ILGa (1999: mapa 218) および

い («va más allá») 例として *vecin* (sic) の複数形 *vecíos* (カスティーリャ語 *vecino* / *vecinos*, ガリシア語 *veciño* / *veciños*)¹² を挙げている。しかし、レオン方言的な特徴もあると言い¹³, 語頭の *l-* と語中の *-ll-* の口蓋化に言及している (ただし全域ではなく, 口蓋化しない場所として *Pesoz*¹⁴ を挙げている)。例に *yeite* (カスティーリャ語 *leche*)¹⁵ などがある。

3.1.2. アストゥリアス語西部方言

Menéndez Pidal はナビア・エオ地域のガリシア語にレオン方言 (アストゥリアス語) 的要素があることを指摘したが, 逆にその東にあるアストゥリアス語の西部方言にガリシア・ポルトガル語的な特徴を見ている。それが *Menéndez Pidal* が「ガリシア・ポルトガル語的二重母音 (diptongos gallego-portugueses)」と呼ぶ下降二重母音で, 中央方言の *cosa*, *poco* が西部では *cousa*, *pouco* になる (147/47)¹⁶。

このように, *Menéndez Pidal* にとっては, ガリシア語とアストゥリアス語 (レオン方言) の境はラテン語の短い *ō, ē* の二重母音化の有無で決まるものだが, 境界線を超えて広がる特徴がそれぞれ存在することも認めているのだ。下に *Menéndez Pidal* による方言区分の図 (138/38) を掲げる (フォーマットは変えてある)。

gallego	gallego oriental	leonés occidental	leonés oriental	castellano
forno			horno	
lobo	llobo			lobo
ela	ella	eṭṣa		ella
ano		año		
raa	mau	rana		malo
terra	corpo	tierra		cuerpo
caldeiro outro			caldero otro	
chave			llave	

Fernández Rei (1991: 59) を参照。

¹² *Vecín* < VICĪNU. ただし, 現代の標準ガリシア語では *veciño* / *veciños* で, ガリシアの大部分で使われている。 *Vecín* はルーゴ県東部とアストゥリアス, レオン県のビエルソの形 (*Fernández Rei*, 1991: 64)。語形の分布については *ILGa* (1995: mapa 92) および *ILGa* (1999: mapa 249)。 *Viciño* は *veciño* とともに 19 世紀後半から 20 世紀前半までの辞書に現れる (*Santamarina*, 2011)。なお *vecín* はアストゥリアス語の語形と一致している。

¹³ «este gallego limítrofe con el asturiano ofrece también rasgos leoneses (130 / 30, fn. 2)»

¹⁴ *Pesoz* はカスティーリャ語の形。ガリシア・アストゥリアス語では *Pezós*。

¹⁵ *Yeite* < LACTE. 標準ガリシア語では *leite*。標準アストゥリアス語では *lleche*。

¹⁶ 現代標準アストゥリアス語, カスティーリャ語で *cosa*, *poco*, ガリシア語で *cousa*, *pouco*。

3.2. Dámaso Alonso

3.2.1. ガリシア・アストゥリアス語の位置付け

Dámaso Alonso は主に 1940 年代から 50 年代にかけてガリシア・アストゥリアス語について一連の研究を残しており、当時、現地調査を通じてこの言語の実態を最も良く知る研究者のひとりであった。ガリシア・アストゥリアス語 (gallego-asturiano) という名称は、D. Alonso が使ったことで広まったと考えられる。以下の引用から明らかなように、アストゥリアスにおけるガリシア語の方言という意味合いで使っている。

... zonas del gallego que llamo exterior, dialectos gallegos hablados fuera de los límites políticos de Galicia, a saber: en el Occidente de Asturias (gallego-asturiano); y en el Bierzo, provincia de León (berciano o gallego-leonés). (Alonso, 1972b: 32)

これによれば、レオンにおけるガリシア語方言がガリシア・レオン語 (gallego-leonés) ということになるが、これについてはガリシア・アストゥリアス語を含む使い方をしているところもある。

Llamamos gallego exterior o gallego-leonés al hablado fuera de Galicia, en tierras limítrofes con ella. El gallego exterior o gallego-leonés comprende una serie de hablas que son básicamente gallegas, con rasgos que, aunque a veces varían respecto al gallego considerado como normal en Galicia, están dentro del sistema lingüístico galaico, si lo miramos en una perspectiva sincrónico-diacrónica; pero junto a estos rasgos esencialmente galaicos, presentan siempre las hablas del gallego exterior unos pocos que son propios del dialecto leonés. Una rama del gallego-leonés es el hablado en el extremo occidental de Asturias, que muchas veces, por rapidez, llamamos gallego-asturiano; otra es el gallego-leonés hablado en el NO. y parte del O. de la provincia de León [...]; otra rama es el gallego-zamorano, hablado en el extremo NO. de la provincia de Zamora (Alonso & García Yebra, 1972: 315–6).

つまり、若干のレオン方言的特徴を含むという性格づけに対応する gallego-leonés の下位変種として、行政区域であるレオン県に対応する gallego-leonés やアストゥリアスに対応する gallego-asturiano があることになる。いずれにせよ、D. Alonso によるガリシア・アストゥリアス語の位置づけは、Menéndez Pidal 同様、ガリシア語の変種であり、レオン方言的な特徴も含むということになる。

3.2.2. ガリシア・ポルトガル語的特徴

D. Alonso は、ポルトガル語とカスティーリャ語の母音体系を扱った論考の中で次のように述べ、ガリシア・アストゥリアス語を含めたガリシア・ポルトガル語圏に特徴的な現象を 4 つ特定している。

Hay que colocar en primera línea el hecho de la metafonía verbal en la segunda y la tercera conjugación, junto a otros fenómenos que se suelen considerar característicos del dominio gallego-portugués: la conservación normal de *õ* y *ẽ* como *o* y *e*, la caída de *-n-* y el infinitivo conjugado (Alonso, 1972b: 33).

そのうち2つは既に Menéndez Pidal が挙げているもので、ラテン語の *õ, ẽ* が二重母音化せずに広い *o, e* となったというものと、母音間の *-n-* の消失がそれである。ここで新たに、人称不定詞の存在と第2第3活用動詞における母音変異が付け加わっている¹⁷。

3.2.3. 人称不定詞

人称不定詞 (あるいは活用不定詞) は、ポルトガル語における存在が良く知られているが、ガリシア語にもある¹⁸。ガリシア・アストゥリアス語については Babarro González (2003: 430–1) が人称不定詞の記述をしているが、西部 (つまりガリシア寄り) の方が活力があるという。また、西部の Vegadeo¹⁹ を記述した Fernández Vior (1997: 274) には人称不定詞への言及があるのに対して、東部にある El Valledor の言語を対象とした Muñiz (1978) には記述がない。ILGa (1990: mapas 28–31) ではガリシア・アストゥリアス語地域について北部の Calvario de Salave, 北東部の Coaña, Boal を除いて存在が確認できる²⁰。これらの記述から、アストゥリアス語との境界近くでは人称不定詞が使われていない可能性があるものの、D. Alonso の観察は基本的に当を得ているといえる。

3.2.4. 母音変異

第2第3活用動詞における母音変異は、次のような現象を指す。まず第2活用の例を標準ガリシア語の例で示す。

	comer		beber	
	直説法	接続法	直説法	接続法
1sg.	como [o]	coma [o]	bebo [e]	beba [e]
2sg.	comes [ɔ]	comas [o]	bebes [ɛ]	bebas [e]

¹⁷ 「母音変異」は *metafonía* の訳として使う。

¹⁸ ガリシア語の人称不定詞を扱ったモノグラフィとしては Gondar (1978) がある。標準化以降の記述としては Álvarez & Xove (2002: 307-8) を参照。

¹⁹ Vegadeo はカスティーリャ語形。ガリシア・アストゥリアス語では A Veiga である。

²⁰ ILGa の言語地図 (ALGa) にはナビア川以東のデータはなく、伝統的に考えられているガリシア語とアストゥリアス語の境界に達していない。したがって、データの無い地点で人称不定詞を持たない場所は、さらに多いと推測される。

3sg.	come [ɔ]	coma [o]	bebe [ɛ]	beba [e]
1pl.	comemos	comamos	bebemos	bebamos
2pl.	comedes	comades	bebedes	bebades
3pl.	comen [ɔ]	coman [o]	beben [ɛ]	beban [e]
命令法 2sg.		come [o]		bebe [e]

語根の *o, e* にアクセントがある場合、直説法現在の 2 人称単数、3 人称単数・複数においては広い *ɔ, ɛ* となり、直説法現在の 1 人称単数と接続法現在 1 人称単数、2 人称単数、3 人称単数・複数、命令法 2 人称単数では狭い *o, e* となる²¹。例に挙げた *beber* (< BĪBĒRE) から分かるように、通常の音変化から *ɔ, ɛ* が期待されるものとは限らない (Fernández Vior, 1997: 281)。したがって、完遂しなかったとはいえ第 2 変化 (-er) の動詞に体系的に働いた類推作用が想定される。

第 3 活用 (-ir) の動詞については、事情がより複雑である。まず、問題となる現象の例を標準ガリシア語の語形で示す。

	dormir		seguir	
	直説法	接続法	直説法	接続法
1sg.	durmo [u]	durma [u]	sigo [i]	sigá [i]
2sg.	dormes [ɔ]	durmas [u]	segues [ɛ]	sigas [i]
3sg.	dorme [ɔ]	durma [u]	segue [ɛ]	sigá [i]
1pl.	durmimos	durmamos	seguimos	sigamos
2pl.	durmides	durmades	seguides	sigades
3pl.	dormen [ɔ]	durman [u]	seguen [ɛ]	sigan [i]
命令法 2sg.		durme [u]		sigue [i]

²¹ ただし、語根に *o, e* を持つ全ての動詞がこの変化をするわけではない。アクセントがあるときに常に *ɔ, ɛ* になるもの (*poder, querer*) もあり (Real Academia Galega (RAG) 2012: 123, Muñiz 1978: 294, Fernández Vior 1997: 281), 常に閉じた *o, e* になるもの (*deber, -cer*) もある (RAG 2012: 123, Fernández Vior 1997: 277, 343)。ポルトガル語においても、*poder, querer* が強勢位置で常に *ɔ, ɛ* である点はガリシア語と変わらない (*posso, podes...; quero, queres*) が、その他は基本的に交替が起こるようだ。交替がない動詞は音韻体系上の理由がある。語根母音が鼻母音のもの (*romper, encher*) は母音の開閉の対立がないので交替がない。さらに、ブラジルにおいては母音に鼻子音が続く場合 (*comer, temer*) も母音の開閉の対立がないので、やはり交替しない (Cunha & Cintra, 1987: 416)。なお、ポルトガル語ではガリシア語と異なり、命令法 2 人称単数も広い *ɔ, ɛ* になる。

最初の例 *dormir* では語根母音が無強勢では *u* で、アクセントがあると *u, o* が交替する。このタイプの動詞は多くない (RAG 2012: 127)。ガリシア・アストゥリアス語においては不定詞に無強勢の *o* を持つ *dormir* も *durmir* と並んで報告されている (Muñiz 1978: 300, 331, Fernández Vior 1997: 279, 282)²²。無強勢の *o* については、古いガリシア語で *o...ir* であった動詞が *u...ir* に移行し、現在ではその変化はほぼ完了しているという (RAG 2012: 128)。だとすれば、ガリシア語における *dormir* は古形の残存だと考えることができる²³。なお、ポルトガル語では書記上は *dormir, dormimos, dormis* で *o* が使われているが、ポルトガルにおける発音は [u] で、ブラジルでは [o] と [u] の間で揺れがある (Cunha & Cintra, 1987: 417)。

さて、現代ガリシア語ではこのタイプの動詞の語根母音を *u* に固定して規則動詞化する傾向がある (RAG 2012: 128)²⁴。ガリシア・アストゥリアス語については、Babarro González (2003: 389) は母音交替と規則化の両者が併存していると報告している。Muñiz (1978: 300) は *dormes, dorme, dormen* と *durmes, durme, durmen* の両方を記載している。Fernández Vior (1997: 279, 282) は *dormir* については母音交替のある形のみを挙げているが、このタイプの動詞は Vegadeo において「ガリシア語におけるほどは多くない (no es tan abundante como en gallego)」として、実際 *dormir* と *tusir* だけに限られると述べている (279)。なお、Fernández Vior (1998: *durmir*) は «Durme el neno mèntrès frègo nos cacharros» という例を挙げている。この *durme* は他動詞用法の命令法 2 人称単数形とも解釈できるが、*el neno* を主語とする自動詞と考えることもできるので、母音交替の例とも規則動詞化の例とも断言できない。

さて、*seguir* のタイプでは語根母音がアクセントのある位置で *i, e* の交替を示す。D. Alonso は、第 3 活用動詞が示す状況は第 2 活用と比べて揺れがあるとし、«en Oscos se oye *sirbo, serbes* o *sirbes, serbe* o *sirbe* (Alonso, 1972b: 33)»²⁵ と述べ、ガリシアについても、すでに 1868 年に Saco Arce (1868: 81) による記述があることに言及している²⁶。RAG (2012: 125) も、このタイプはアクセントのある母音が *i* に固定して *sigues, sigue, siguen* となる傾向が

²² Fernández Vior (1998) は *durmir* のみを収録している。発音表記は /dURmíR/ で、無強勢母音は /o/ と /u/ の対立が中和しているかのような印象を与えるが、記号の価値についての説明はない。一方 Fernández Vior (1997: 59) は強勢前では *o* と *u* の対立があるとしていて、記述に不整合があるように見える。

²³ ILGa (2005: mapas 264, 265) で *dormir* の語形を確認することができる。

²⁴ ALGa のデータによれば *durmir* は母音交替が優勢だが、*subir* は母音交替と規則化が拮抗している (ILGa, 1990: mapas 192, 193)。

²⁵ ガリシア・アストゥリアス語では /b/ と /v/ の対立がないので、D. Alonso は *v* を表記に使っていない。

²⁶ Saco Arce が挙げている形は «*Sirvir servir ... sirvo, serves ó sirves* (81)». 引用中の *servir* は *sirvir* に対するカステリーヤ語訳と解釈されるので、不定詞の母音は *i* のみである。

強いとしているが、ガリシア言語語地図 (ALGa) 中には、このタイプの動詞の例を見つけることができなかった。Babarro González (2003: 390) は他の研究を参照して母音交替の存在を指摘しているが、自分が採集した実例は挙げていない。Muñiz (1978: 301) は *reñir* (*riñir*) について *reñes, reñe, reñen* と *riñes, riñe, riñen* の両方を記載しているが、*reñemos, reñedes* の形も (まれではあるが) あるとし、第 2 活用と第 3 活用の両方の変化形を持つ «doble conjugación (según la 3a. y la 2a.)» の可能性として扱っているようだ。Fernández Vior (1997: 279) は強勢位置における *i, ε* の交替については述べておらず、無強勢の *e* と強勢のある *i* が交替するタイプのみ言及している。しかも、このタイプの無強勢位置で語根母音が *i* になって規則動詞化する傾向を指摘している。なお、Fernández Vior (1998) は *pedir* と *pidir* を収録しているが、*seguir, servir* は *e* を含む形のみを挙げている²⁷。同様に Muñiz (1978: 303) も *pedir / pidir* を例に無強勢位置における *e* と *i* のゆれを報告している。

一方、語根母音を *i* で固定する規則動詞化はアストゥリアス語にも見られる。

El fonema /i/ en sílaba átona presenta, en munches ocasiones, realizaciones fonéticas que van dende la [i] más zarrada a la [e] más aberta. Sicasí, ha representase na escritura cola lletra «i». Exemplos: *midir*, non **medir* [...] // Les formes débiles d'un verbu escríbense con «i» átona si les formes fuertes de la mesma conxugación lleven *i* tónica. Exemplos: *midir* (yo *mido*), *pidir* (tu *pides*), *dicir* (él *diz*), *rindise* (ellos *ríndense*), *siguir* (yo *sigo*), *servir* (tu *sirves*), *tiñir* (él *tiñe*), *vístise* (ellos *vístense*), *ximir* (yo *ximo*), *ciñir* (tu *ciñes*), *firir* (yo *firo*), etc. (ALLA, 2001: 26)

無強勢母音の音色に揺れが観察されるが、規範的には *i* で表記するという説明だ。実際には *e* と *i* の交替を示す動詞もあるが、数は少ないとして *correxir* と *repetir* を挙げている (ALLA, 2001: 197)。ただし無強勢位置ですべて *e* というわけではなく *corrixendo, repitió, repitiendo* のように *i* が出る環境がある (ibid.)。カスティーリャ語の *corregir, repetir* と同様の母音交替があるように見える²⁸。

ちなみに、上に挙げられた動詞に対応する標準ガリシア語の形を見てみると、*medir, pedir, vestir(se)* が強勢位置で *i* になるタイプ、*seguir, servir, ferir* が強勢位置で *i, ε* の交替のあるタイプ、*render(se), xemer* は第 2 活用に属し、*tinguir (tinxir), cinguir, (cinxir)* は *i* で固定した規則動詞、*dicir* は不規則動詞だが語根母音は *i* で不変である。また *midir, pidir, vistir*;

²⁷発音表記は *pedir, pidir* とともに /pIdiR/. *Seguir* は /sIgiR/, *servir* は /sIRbiR/ で、*dormir* における /u/ と /o/ の場合と同様、無強勢位置での /i/ と /e/ の中和を思わせる表記になっていて、Fernández Vior (1997: 59) の記述と不整合があるように見える。

²⁸ なお、対応するカスティーリャ語の動詞のうち *medir, pedir, render(se), seguir, servir, teñir, vestir(se), gemir, ceñir* は語根母音が強勢位置では *i* になる。*Decir* は不規則だが、強勢位置の語根母音は *i* である。また *herir* の語根母音は強勢位置で *ie* になる。

siguir, servir, firir, ximir, tíñir の語形が Santamarina (2011) で確認できる²⁹。つまり、ガリシアにおいても語根母音の無強勢位置での揺れがあり、i で揃える規則動詞化の傾向があることが分かる。なお、Muñiz (1978: 301) が reñir と同タイプの動詞として teñir を挙げているのは注目に値する。つまり、非標準形でかつ母音交替の可能性を持つということで、ガリシア・アストゥリアス語がこの活用タイプと決して無縁ではないことを示す。

さて、標準ポルトガル語では vestir(se), seguir, servir, ferir が i, ε の交替を示す。また medir, pedir は不規則動詞で、強勢のある語根母音は ε で固定である³⁰。Render(se), gemer, tingir, cingir, dizer については、標準ガリシア語と同様のことが言える。ポルトガル語にも語根母音が強勢位置で i のみを示すタイプはある (agredir) が、ガリシア語と比べると少ない³¹。ただし、14 世紀末以降のポルトガル語で segues / sigues (seguir) のような揺れが見られ、現在の北部方言では強勢位置で i に固定されているという (RAG, 2012: 125)。

いずれにせよ、標準ポルトガル語・標準ガリシア語で i, ε が交替する動詞が、ガリシア・アストゥリアス語を含むガリシア語の一般的傾向では強勢位置で i のみになる。さらには無強勢位置も含めて i で統一した規則動詞化の傾向がガリシア語とアストゥリアス語に見られる。その点で, sêgues, sêgue をガリシア語, sigues, sigue をアストゥリアス語に割り振って対比させている Frías Conde (2001: 63) の表は過度な単純化を行っていると言える。また、語根母音が強勢位置で i になるタイプの動詞はカスティーリャ語にもあり、特にガリシア・ポルトガル語的特徴であるとは言えない。したがって、第2活用における母音変異と比べて、ガリシア・アストゥリアス語のガリシア語性を示す力は弱い。しかし, pidir のような i による規則動詞化はガリシアにも見られることから、アストゥリアス語的特徴と見なすこともできない。

3.3. Babarro González

ガリシア・アストゥリアス語をガリシア語の変種と見なす伝統的な立場として Menéndez Pidal と D. Alonso の説を紹介したが、現在も多く研究者がこの立場を前提にしていると言ってよい。たとえば、ガリシア言語語地図 (ALGa; ILGa 1990-) は、対象地域をガリシア自治州に限っておらず、ガリシア・アストゥリアス語についても、この地域全体をカバーしてはいないものの、この変種をガリシア語に含めて記述している。

Menéndez Pidal はラテン語の短い ð, ě の二重母音化の有無によってガリシア語とレオ

²⁹ Saco Arce (1868: 72) は pidir のパラダイムを掲載している。

³⁰ Medir の形を挙げておく: meço, medes, mede; medem, meça, meças, meça, meçam (Cunha & Cintra, 1987: 416)

³¹ 「agredir 型の動詞は degenerir, prevenir, progredir, regredir, transgredir しか (池上, 1987: 216)」 ということ。

ン方言 (アストゥル・レオン語) の境界を決めていた³²。現在ではより多くの特徴を考慮するのが普通である。その中で、現時点での到達点を示していると思われる Babarro González (2003) に触れておく。Babarro González は、ガリシア語とアストゥリアス語西部方言を分つ特徴として 14 の変項を挙げている (87–153)³³。また、ガリシア語とアストゥリアス語西部方言に共通で、アストゥリアス語中央方言と対立する特徴を 11 挙げている (154–166)。すべての等語線が一致するわけではないので、ガリシア語的特徴とアストゥリアス語的特徴をそれぞれ無視できない割合で持つ地域がある。Babarro González は、そういう特徴を持つ 3 地域 (Navia 東部の一部, Villayón³⁴ 東部の一部, Ibias の一部) について、前 2 者はガリシア語圏に含めるべきだとする «deberían incluírse dentro do dominio galego (185)» が、最後の tixileiro と呼ばれる変種は «móstrasenos como unha fala híbrida galego-asturiana (185)» として、ガリシア語とアストゥリアス語のどちらに含めるべきか明言していない。興味深いことに、Babarro González (1994) は «Estas comarcas débense agrupar dentro da xeografía dialectal do galego (138)» と述べており、より断定的にこれらの地域をガリシア語に含めていた (débense と deberían の違いも注意を引く)。つまり、2003 年の段階では以前より慎重になっているのである。これには、次節で扱う連続体を巡る議論が影響しているのかもしれない。

4. 連続体

4.1. García Arias

4.1.1. García Arias (1997)

García Arias (1992: 681) はアストゥリアス語とガリシア語との境界について «Por el occidente resulta difícil establecer límites precisos con el gallego puesto que las isoglosas se entrecruzan muy complejamente entre los ríos Navia y Eo» と述べて、Menéndez Pidal の断定的

³² Menéndez Pidal がガリシア語とレオン方言の境界画定のために *ø, ɛ* の非二重母音化とともに母音間の *-n-* の消失を考慮したという意見もある: «os criterios para marcar estes límites, atendendo sobre todo a dous elementos fundamentais (M. Pidal; 1961:16-18): primeiro, o tratamento de /ɛ/ e /ɔ/ tónicos latinovulgares, que ditongan en asturleonés mais non o fan en galego-portugués; e segundo, o tratamento de /n/ intervocálico, que se conserva en asturleonés mais cae en galego (Frías Conde, 2001: 53)». しかし、母音間の *-n-* の消失は注で «otro rasgo gallego (Menéndez Pidal, 2006: 130, 30, fn. 2)» として触れられるにとどまっているので、非二重母音化と同等に扱っていないのは明らかである。

³³ 節の分け方としては 13 だが、Babarro González (1994) で 2 つにカウントしている項目が 1 つの節の下位区分になっている。具体的にはラテン語の *ø, ɛ* の結果が、音節末に鼻音がある場合とない場合で異なる等語線を示す。

³⁴ Villayón は ALLA の規範による表記。ガリシア語的な綴りは Villaión だが、Babarro は Villallón としている。

な態度とは正反対の見解を示している。それを具体化したのが García Arias (1997) で、具体的な現象を挙げて «El gallego-asturiano, dau'l so calter de llingua de transición, allínease unes vegaes col dominiu más occidental y otre col asturiano (45)» であると主張している。

まず、ガリシア語とアストゥリアス語が異なる解決を示す特徴として次のものを挙げている。

	ガリシア語圏	アストゥリアス語圏
a)	非二重母音化 (terra, corpo)	二重母音化 (tierra, cuerpu)
b)	l- の保持 (lobo)	口蓋化 (llobu)
c)	-ll- の単子音化 (ela)	口蓋化 (ella)
d)	-l- の消失 (pao)	保持 (palu)
e)	-n- の消失 (lúa)	保持 (lluna)
f)	lj, c'l, g'l > ʎ ³⁵ (muller)	口蓋化 j ³⁶ (muyer)
g)	bl-, gl- > l (liria)	口蓋化 ʎ (lliria)
h)	非軟口蓋化 (cóbodo)	軟口蓋化 (coldu)

ガリシア・アストゥリアス語は、このうち a(非二重母音化) と e(-n- の消失) をガリシア語と共有している。他の特徴については、地域内で一様ではないが、l-, -ll- を口蓋化した(つまり b と c においてアストゥリアス語的特徴を示す) 地域では b, c, d, f, g, h においてアストゥリアス語と特徴を共有しているという (45)。

García Arias は触れていないが、このうち d については、ガリシア・アストゥリアス語全域で -l- の保持というアストゥリアス語的特徴を示す (ILGa 1999: mapas 272–280)。つまり、-ll- を口蓋化しない地域では -ll- と -l- の結果が -l- として合流することになる。Martinet (1974) は «Hallamos distinción entre el resultado de -l- y el de -ll- en toda la Península Ibérica (§11.25, 392)» と述べている。消失と単子音化 (ガリシア語) にせよ、保持と口蓋化 (アストゥリアス語) にせよ、ラテン語の -l- と -ll- の対立が維持されるというのだが、ガリシア・アストゥリアス語の一部地域はこれに対する反例となっているわけだ。

latín	galego	galego-asturiano (西)	galego-asturiano (東)
SOLUM	só	solo	solo
ILLAM	ela	ela	ella

³⁵ García Arias はスペイン式の ʎ を使っている。

³⁶ García Arias はスペイン式の y を使っている。スペイン式の y を機械的に IPA の j で置き換えることには問題があると思われるが、一応このままにしておく。

Martinet はさらに «En toda la Península Ibérica [...] se ha mantenido una distinción entre lo que originariamente fueron *-n-* y *-nn-* (§11.24, 391)» と述べている。García Arias (1997) は *e* として *-n-* の結果を挙げているが、*-nn-* の結果には触れていない。しかし、ガリシア語の単子音化 (*ano*) とアストゥリアス語の口蓋化 (*añu*) を付け加えるべきだろう。García Arias 自身、ラテン語の *n-*, *-nn-*, *-n-* と *l-*, *-ll-*, *-l-* の構造的扱いをガリシア語とアストゥリアス語の共通点のひとつとして挙げている (44) のだから、この扱いは不可解にも見える。しかし、*-nn-* の単子音化がアストゥリアス語西部方言にまで広がっていることが分かれば、不可解さは減少する。現代の標準アストゥリアス語では *-nn-* は口蓋化した形が取り入れられているが、単子音化の地域はかなり広い (Babarro González 1994: 116)。おそらく、García Arias は、この現象をガリシア語とアストゥリアス語で扱いが異なる現象と見なさなかったのだろう。もちろん、その場合、彼の言う *n-*, *-nn-*, *-n-* の構造的扱いがどのようなものなのか、理解が難しくなる。実際、アストゥリアス語西部方言で *-nn-* を単子音化した地域では *-n-* は消えずに保たれており、Martinet の観察に対する反例を構成する。Babarro González (1994: 115) が挙げている例から今の議論に関係するものを引くと、以下のようになる³⁷。

latín	galego	bable occidental (B, C, D)	bable occidental (A)
LUNAM	lúa, llúa	šuna	lluna
CAPANNA	cabana	cabana	cabaña

このように、*-l-* の保持というアストゥリアス語的特徴がガリシア・アストゥリアス語にあり、*-nn-* の単子音化というガリシア語的特徴がアストゥリアス語西部方言の広い地域に見られることは、ガリシア語とアストゥリアス語の境界画定 (およびガリシア・アストゥリアス語の言語帰属) 問題にとって興味深い事実である。また、Martinet (1974) の断定に対する反例が、伝統的にガリシア語と見なされている地域とアストゥリアス語とされる地域の両方に見いだされることも、同様に興味深い。しかし、García Arias の論は、ガリシア語とアストゥリアス語の境界について、伝統的に考えられている *ó, ě* の二重母音化による線を西に向かって曖昧化しようとしているように読め、境界が東に移動する可能性は最初から排除されているように見える。

³⁷ Bable occidental は Babarro González (1994) の用語による。A–D はアストゥリアス語西部方言の下位区分で、A が北東部、B が南東部、C が北西部、D が南西部。

4.1.2. García Arias (1985)

García Arias (1985) は、ラテン語の *pl-*, *cl-*, *fl-* がガリシア語で [ʎ], ポルトガル語で [j], カスティーリャ語で [ʎ] になるのに対して、アストゥリアス語では [ʎ, j, te, ʝ]³⁸ といったバリエーションが観察され、ガリシア・アストゥリアス語地域では、ガリシア語と同様の [ʎ] になっているとした上で、主に地名の分析から、この地域のみならずガリシアの一部にも [ʎ] の例があると述べている。このことは、一般に言われているよりもアストゥリアス語的要素がかつては広い範囲に広がっていたことを示す (1985: 28)。また、ある言語圏 (*dominio*) 内部で変化が一様だったという考えは「幼児的 (*infantil*) (27)」であるという。さらに、「*Nin siquiera los dominios llingüísticos que llograron un estándar fonon a tapecer delles de les variantes surdies daquela (=variación consonántica: Kawakami). Nos dominios onde l'estándar nun s'algamó los nicios fónicos de la variación son munchos más (28)*」とも述べており、ここから、カスティーリャ語、ガリシア・ポルトガル語といった言語圏がそれぞれの地域内部で一様な変化をしたように見える原因のひとつは、標準化による均質化であるという考えも読み取れる。

ここでの García Arias の主張はもともとと言えるが、ガリシア・アストゥリアス語がガリシア語の変種であることを否定するに足る材料を提供しているわけではないし、そこまで明確に主張しているようには読めない。ガリシア語にせよ、アストゥリアス語にせよ、標準語の形成はかなり新しい。従って内部に多様性を抱えていても特に不思議ではない。また、García Arias が検討しているような地名に残る音変化の結果は、かつて存在したバリエーションを示すと同時に、それが一般的でないということも示す。つまり、問題の言語圏の内部では淘汰されたバリエーションだということだ。García Arias の意図とは独立に、[ʎ] が定着しなかったという点で、ガリシア・アストゥリアス語がガリシア語の圏内に含まれると考えることは可能だろう。

より興味深い論点は、これも García Arias (1985) 自身が展開しているわけではないが、言語圏と標準化との関連である。アストゥリアス語西部方言にはガリシア語と共通の特徴が見いだされるが、中部方言を土台にした標準語を拒否して独自の規範を持つという動きは見られない。ところが、ガリシア・アストゥリアス語においては、標準ガリシア語をそのまま使おうという方向性も、標準ガリシア語の正書法をベースにガリシア・アストゥリアス語的特徴を取り入れるという方向性 (*Asociación Abertal del Eo-Navia*, 2010) も、広く支持されて定着しているとは言いがたい。むしろ、標準ガリシア語とは一線を画した規範化を進める動きの方が活発で、アストゥリアス語アカデミーとアストゥリアス自治政府が採用した規範 (ALLA, 2007) は、これに沿ったものである。後者の規範は、結果的にアストゥリアス語的特徴を多く採り入れたような印象を与えるものになっている。この状況が

³⁸ García Arias はスペイン式の [j, y, ð, ç] を使っている。

自治州という行政上の単位が作り出す境界に影響を受けていることは確かだが、言語的な根拠が全くないというわけでもない。つまり、ガリシア語圏の内部的多様性に注目して既存の標準語とは異なる規範が志向されたということだ。このことは、ガリシア・アストゥリアス語がガリシア語圏の外にあることを意味するわけではないが、この地域においてはガリシア語圏性が不安定であるとは言えるかもしれない。

4.2. 連続体と言語境界

Penny (2000) は、イベリア半島のロマンス語をガリシア・ポルトガル語、カステリーヤ語、カタルーニャ語に3分する見方を、次のように述べて批判している。

... in order to justify a classification which places Galician-Portuguese on a branch separate from that of the central Peninsular varieties, very few features are available, and maximum attention is given to the non-diphthongization of Latin Ē and Ō (by contrast with their diphthongization in the centre). If such attention is not to be regarded as arbitrary, then some objective justification for the prominence of this feature must be found. However, there seems to be none (26-27).

これはラテン語 ě, ō の扱いを特権化する Menéndez Pidal 以来の考え方に対する批判で、ガリシア語圏がはっきりした境界を持つというこの見方は事実の歪曲であると言う。

... the division of this continuum into three branches, or into any number of branches, falsifies our picture and leads to such false concepts as the following: ‘Galician is spoken in the extreme west of Asturias’ or ‘Catalan is spoken in the eastern fringe of Huesca’, when all that can be meant is that the isogloss separating diphthongization from non-diphthongization of Latin Ē and Ō passes down a little to the east of the political boundary between Galicia and Asturias, or a little west of the boundary between Huesca and Lleida/Lérida (Penny, 2000: 27).

また、Penny (2009) は22項目について等語線を検討し「hay pocas coincidencias entre las isoglosas (57)」と述べ、ガリシア語とアストゥリアス語の境界線は存在しないと結論づけている。

A lo sumo, se puede considerar que la acumulación de isoglosas es mayor en la parte oriental de la zona estudiada que en otras partes, y que, por consiguiente, la transición dialectal es allí algo más rápida que la que se observa más al oeste. Pero en ninguna parte se observa una transición abrupta, y por eso no existe ninguna configuración de las isoglosas que pudiera justificar el empleo del término “frontera dialectal”, ni nada que justifique la opinión de que se hable “gallego” en una parte del territorio y “asturiano” en otra (57).

同様に Dubert García (2011) は «no caso que nos ocupa, as falas do noroeste da Península Ibérica, o que encontramos é unha gradual modificación (434)» と述べ、 «Potenciar un trazo sería cometer o mesmo erro (si, creo que foi un erro) de Menéndez Pidal de sobrevalorar a ditongación de ð, ... / ... as fronteiras que trazan os dominios son ilusións creadas polo propio método de agrupamento (437)» としている。言語圏という概念は抽象の結果得られるものであり、語圏の境界も「幻想」に過ぎないというわけだ。

それに対して Andrés Díaz (2011a) は «1. Tesis glotológica de la transición o contínuum / 2. Tesis glotológica de la adscripción gallego-portuguesa (128)» という 2 つの観点について次のように述べている³⁹。

Interesa destacar que la tesis (2) no impugna la tesis (1), sino que es compatible con ella, dado que las hablas del Eo-Navia parecen mostrar una gradualidad creciente de rasgos «orientales» según se avanza hacia el Este, y por tanto podemos decir que es un gallego-portugués de transición al asturleonés: es un contínuum fronterizo. La tesis (1) es, por tanto, perfectamente admisible, pero quizá no tanto la manera en que es presentada en algunos trabajos recientes. En ellos, por un lado, se le atribuye un poder impugnador o excluyente de la tesis (2), planteando que la noción de contínuum lingüístico bloquea cualquier tipo de adscripción geotipológica: no es ni gallego ni asturiano, sino *sola y exclusivamente* una transición (129).

Andrés Díaz にとって、連続体の事実は、ガリシア・アストゥリアス語がガリシア・ポルトガル語圏に属することと矛盾しない。したがって、連続体であることを言語圏への帰属を否定する根拠として利用する最近の説は受け入れられないという。Andrés Díaz は、そういう説のひとつとして、上で検討した García Arias (1997) も挙げているが、より明確にこの立場を表明しているものとして ALLA (2006) からの一節を引用している⁴⁰。

Dende un punto de vista llingüístico, el estudio pormenorizado da fala del Navia-Eo brinda a imaxe d'un territorio onde s'entremezclan trazas llingüísticas gallegas e asturianas, ademais de características propias da zona. É entoncias arbitrario científicamente, y é un exercicio de voluntarismo político, incluír esta variedade llingüística dentro del ámbito da lingua gallega (39).

この言明から容易に推測できることは、ガリシア・アストゥリアス語の言語帰属問題には、

³⁹ Andrés Díaz は «3. Tesis glotológica de la adscripción asturleonés» は、アストゥル・レオン語圏に属すと見なすに足る数のアストゥリアス語的特徴はなさそうだとし、 «4. Tesis glotológica del nuevo dominio lingüístico gallego-asturiano» は、独立した語圏を形成すると見なすに足る数の独自の特徴がなさそうだとし、それぞれ却下している (128)。

⁴⁰ Andrés Díaz は ALLA (2006) のカスティージャ語版から引用しているが、ここではガリシア・アストゥリアス語版による。

純粹に言語学的な連続体と境界の問題とは異なるレベルの、政治的問題が関わっているということである。これ自体は言語帰属問題に対して興味深い論点を提供するが、今検討の対象にしているのは言語学的な論拠である。Andrés Díaz にとって、連続体を認めたくえで言語圏の境界を語ることは可能だが、それは両者の抽象度が異なり、後者は前者を前提とするからである (2011a: 126)。したがって、境界は Penny (2009) が考えているものとはかなり異なるものであり得る⁴¹。

Las fronteras pueden ser más o menos nítidas, o más o menos difusas. Las fronteras difusas, en forma de zonas de transición o contínuums, son también fronteras. No hay incompatibilidad entre frontera y contínuum; sencillamente, existen contínuums fronterizos (Andrés Díaz 2011a: 146).

この理論的基盤の上に、ガリシア・ポルトガル語圏とアストゥル・レオン語圏の境界の状況を明らかにしようとしたのが ETLEN プロジェクトである。このプロジェクトでは 532 に上る変項を対象にガリシア・アストゥリアス語地域 (と隣接地域) の計量的な言語地理学的研究を行っている。上述の論文に掲載された中間報告的な地図が示すクラスター分析 (Álvarez-Balbuena García et al, 2011: 132)⁴² を見る限りでは、伝統的な言語圏境界が大きく動くことはなさそうな印象を受けるが、ガリシア・アストゥリアス語地域東部にはかなり「東部的 (アストゥリアス語と共通の)」特徴の割合が大きい部分があることも分かる (Andrés Díaz et al, 2012: 19)⁴³。最終的な結果が待たれるが、ETLEN には 1 本の明確な境界線を提供する意図はないので、最終的には Dubert García (2011) が言うように «como os datos non sempre conducen a unha soa interpretación compartida, tamén pode ser que quedemos como estamos agora (discutindo se hai ou non fronteiras), aínda que cunha base de datos contemporáneos, útil e ben organizada (429)» となる可能性もある。

5. まとめ

スペイン・アストゥリアス自治州の西端で話されているガリシア・アストゥリアス語は、伝統的にガリシア語の変種と見なされている。Menéndez Pidal はラテン語の *ě, ō* の結果が短母音 *e, o* であればガリシア語、二重母音 *ie, ue* であればレオン方言 (アストゥル・レオン語) として、単一の特徴に頼って言語圏の境界を考えた。その後、より多くの特徴を考慮に入れて記述が精密化されてきた。例として D. Alonso の説を検討した。現在、この方向性における到達点を示す研究は Babarro González (2003) で、ガリシア語とアストゥリア

⁴¹ Penny (2009) も、先に引用したように、等語線の集まりが他より密な場所があることは認めている。ただし、それを境界と見なしていないのだ。

⁴² 53 項目を使った結果に過ぎないという注記がある。

⁴³ 44 項目を使った結果に過ぎないという注記がある。

ス語の境界について最も具体的な提案をしている。

しかし、特に 1990 年代以降、連続体という概念に基づいて、ガリシア・アストゥリアス語のガリシア語性を疑う説が現れた。現在、ガリシア・アストゥリアス語の規範化は、この立場に大きく影響を受けている。しかし、これらの説は伝統的な見方を覆すだけの根拠を示し得ていない。一方、連続体概念を認めた上で、言語圏の境界を考える立場がある。ETLEN プロジェクトはこれまでにない多数の変項を使って連続体上の境界を明らかにしようとしており、最終的にどのような結果を提示するか注目される。また、この野心的なプロジェクトは境界概念自体を再定義しようとしている側面があり、理論面での議論にも注目する必要がある。

本稿は、ガリシア・アストゥリアス語の言語帰属問題を巡って論点を整理するもので、新たな説の提示は試みなかったが、Martinet の説に対する反例がガリシア・アストゥリアス語にもアストゥリアス語西部方言にも見られることの指摘と、地名の例はその言語圏で淘汰されたバリエーションであるという点は、ガリシア・アストゥリアス語をガリシア語に含める従来の見方を補強する論点と言えるだろう。

参考文献

- Academia de la Llingua Asturiana 2001. *Gramática de la llingua asturiana*. 3.^a ed. Academia de la Llingua Asturiana.
url: http://www.academiadelalingua.com/diccionariu/gramatica%5C_llingua.pdf.
- 2006. *Informe sobre a fala ou gallego-asturiano: úa perspectiva hestórica, social y llingüística*. Academia de la Llingua Asturiana.
url: http://www.academiadelalingua.com/pdf/Informe_sobre_a_fala_ou_gallego_asturiano.pdf.
- 2007. *Normas ortográficas del gallego-asturiano*. Academia de la Llingua Asturiana.
url: http://www.academiadelalingua.com/pdf/normas%5C_gallego.pdf.
- ALLA = Academia de la Llingua Asturiana.
- Alonso, Dámaso 1972a. *Obras completas I: Estudios lingüísticos peninsulares*. Gredos.
- 1972b. «Sobre el vocalismo portugués y castellano (con motivo de una teoría)». Alonso 1972a, pp. 17-39. (original: 1959).
- Alonso, Dámaso & Valentín García Yebra 1972. «El gallego-leonés de Ancares y su interés para la dialectología portuguesa». Alonso 1972a, pp. 315-357. (original: 1959).
- Álvarez, Rosario & Xosé Xove 2002. *Gramática da lingua galega*. Galaxia.
- Álvarez-Balbuena García, Fernando et al. 2011. «La “horiometría” o dialectometría de frontera». Antonio Moreno Sandoval (ed.) *Actas del IX Congreso de Lingüística General*, pp. 107-134.
- Andrés Díaz, Ramón de 2011a. «Fronteras lingüísticas y geotipos, con atención a la zona Eo-Navia (Asturias)». Andrés Díaz 2011b, pp. 121-151.

- (coord.) 2011b. *Lengua, ciencia y fronteras*. Trabe.
- Andrés Díaz, Ramón de et al. 2012. «Frontières linguistiques et horiométrie: La transition linguistique de l'interfluve Eo-Navia (Asturies) et le projet ETLEN». Xosé Afonso Álvarez Pérez et al. (eds.), *Proceedings of the International Symposium on Limits and Areas in Dialectology (LimiAr)*. Lisbon 2011. pp. 1-21. url: <http://limiar.clul.ul.pt/>.
- 浅香武和 2006. 「エオ・ナビア語の地理的多様性」. 『神奈川大学言語研究』28, pp. 193-206. url: <http://klibredb.lib.kanagawa-u.ac.jp/dspace/bitstream/10487/3845/1/kana-12-18-0012.pdf>.
- Asociación Abertal del Eo-Navia 2010. «Orientaciois prá escrita da nosa lingua». Xosé-Henrique Costas González (dir.) *A xente que soña desperta: Recolla de achegas á lingua e literatura galegas de Asturias*. Universidade de Vigo. url: <http://anl.uvigo.es/UserFiles/File/A%20xente/ORIENTACIOIS.pdf>.
- Babarro González, X. 1994. «A fronteira lingüística do galego co asturiano: Delimitación e caracterización das falas de transición dos concellos de Navia, Villallón, Allande e Ibias». Francisco Fernández Rei (ed.) *Lingua e cultura galega de Asturias: Actas das I^{as} Xornadas da Lingua e da Cultura Galega de Asturias*. Xerais, pp. 81-148.
- Babarro González, Xoán 2003. *Galego de Asturias: Delimitación, caracterización e situación sociolingüística*. Fundación Pedro Barrié de la Maza.
- Cunha, Celso & Luís F. Lindley Cintra 1987. *Nova Gramática do Português Contemporâneo*. 4.^a ed. Edições João Sá da Costa.
- Dubert García, Francisco 2011. «Sobre linguas e fronteiras no noroeste da Península». Andrés Díaz 2011b, pp. 427-441.
- ETLEN = Estudiu de la Transición Llingüística na Zona Eo-Navia, Asturias. url: <http://www.unioviedo.es/etlen/proyecu.html>
- Fernández Rei, Francisco 1991. *Dialectoloxía da lingua galega*. 2.^a ed. Xerais.
- Fernández Vior, José Antonio 1997. *El Habla de Vegadeo : (A Veiga y su concejo)*. Academia de la Llingua Asturiana.
- 1998. *Vocabulario da Veiga*. Academia de la Llingua Asturiana.
- Frías Conde, Xavier 2001. «Os límites entre galego e asturleonés en Asturias». *Revista de Filología Románica* 18, pp. 51-71. url: http://www.romaniaminor.net/ianua/Ianua05/ianua05_07.pdf.
- García Arias, Xosé Lluis 1985. «PI-, Cl-, Fl-, ente'l Navia y Eo». *Lletres asturianas* 17, pp. 25-29. url: <http://www.academiadelalingua.com/lletresasturianas/>.
- 1992. «Asturianisch: Externe Sprachgeschichte. Evolución lingüística externa». Günter Holtus, Michael Metzeltin & Christian Schmitt (eds.) *Lexikon der Romanistischen Linguistik. VI, 1: Aragonesisch/Navarresisch, Spanisch, Asturianisch/Leonesisch*. Max Niemeyer, pp. 681-693.
- García Arias, Xosé Lluis 1997. «El continuum llingüísticu ente'l gallegu y l'asturianu». *Lletres*

- asturianos* 62, pp. 43-50. url: <http://www.academiadelalingua.com/lletresasturianos/>.
- Gondar, Francisco G. 1978. *O infinitivo conxugado en galego*. Verba anexo 13. Universidad de Santiago de Compostela.
- 萩尾生 2005. 「バブレ語／アストゥリアス語関係法」. 渋谷謙次郎 (編) 『欧州諸国の言語法』. 三元社, pp. 222-230.
- 池上岑男 1987. 『ポルトガル語文法の諸相』. 大学書林.
- ILGa = Instituto da Lingua Galega.
- Instituto da Lingua Galega 1990. *Atlas lingüístico galego: Volume I, 1. Morfoloxía verbal*. Fundación Pedro Barrié de la Maza.
- 1995. *Atlas lingüístico galego: Volume II. Morfoloxía non verbal*. Fundación Pedro Barrié de la Maza.
- 1999. *Atlas lingüístico galego: Volume III. Fonética*. Fundación Pedro Barrié de la Maza.
- 2005. *Atlas lingüístico galego: Volume IV. Léxico. O ser humano (1)*. Fundación Pedro Barrié de la Maza.
- Llera Ramo, Francisco José & Pablo San Martín Antuña 2003. *II estudio sociolingüístico de Asturias, 2002*. Academia de la Llingua Asturiana.
- Martinet, André 1974. *Economía de los cambios fonéticos*. Gredos. (Versión española de Alfredo de la Fuente Arranz. Título original: *Économie des changements phonétiques*, 1964, 2.^a ed.)
- Menéndez Pidal, Ramón 2006. *El dialecto leonés. edición conmemorativa 1906–2006*. El Búho Viajero. (Artículo original publicado en 1906, en *Revista de archivos, bibliotecas y museos*, 2-3, pp. 128-172; 4-5, pp. 294-311).
- Muñiz, Celso 1978. *El habla del Valledor: Estudio descriptivo del gallego asturiano de Allande (Asturias - España)*. Academische Pers.
- Penny, Ralph 2000. *Variation and change in Spanish*. Cambridge University Press.
- 2009. «¿Existe una “frontera” entre “gallego” y “asturiano”?». *Revista de historia de la lengua española* 4, pp. 47-61.
- RAG = Real Academia Galega.
- Real Academia Galega 2012. *Normas ortográficas e morfolóxicas do idioma galego*. 23.^a ed. (1.^a ed. 1982).
- Saco Arce, Juan A. 1868. *Gramática gallega*. Imprenta de Soto Freire.
- Santamarina, Antón, (coord.) 2011. *Dicionario de dicionarios da lingua galega*. url: <http://sli.uvigo.es/ddd/>.

Sobre la adscripción lingüística del gallego-asturiano

Shigenobu KAWAKAMI

En este trabajo pretendemos mostrar una visión general sobre el problema de la adscripción lingüística del gallego-asturiano.

El gallego-asturiano se habla en el extremo oeste de Asturias, zona lindante con Galicia, y se le considera tradicionalmente una variedad del gallego. Fue Menéndez Pidal quien señaló como el rasgo determinante que separa el gallego del leonés (asturleonés) la no diptongación de las vocales *ẽ* y *õ* latinas (*ɛ*, *ɔ*) frente a la diptongación (*ie*, *ue*). Consideró asimismo como rasgo gallego la pérdida de la *-n-* intervocálica. Tampoco se le escapaba el hecho de que hay rasgos asturianos en zonas lingüísticamente gallegas y viceversa. Dámaso Alonso, por su parte, aportó dos rasgos más que refuerzan la tesis de la adscripción gallega del gallego-asturiano: la existencia del infinitivo conjugado y la metafonía verbal. Actualmente se puede considerar que la investigación de Babarro González es la más elaborada dentro de esta línea.

Frente a esta tradición han surgido una serie de estudios que, basados en el concepto de *continuum*, cuestionan la galleguidad lingüística del gallego-asturiano. García Arias, por ejemplo, hace notar que en la zona gallego-asturiana se observan más fenómenos comunes con el asturiano de lo que se suele pensar, aunque no presenta, a nuestro juicio, suficientes pruebas como para poder refutar la opinión más ampliamente aceptada.

Por otra parte, hay quien niega tajantemente, como Penny, la existencia de frontera entre el gallego y el asturiano. Para Andrés Díaz, sin embargo, el concepto de *continuum* es compatible con el de frontera porque ambos pertenecen a distintos grados de abstracción. El proyecto ETLEN, basado en esta teoría, pretende trazar la frontera entre los dos dominios lingüísticos en cuestión; y, viendo los datos provisionales que se han publicado, parece que la visión tradicional no va a tener que ser modificada en gran medida, aunque hay que esperar los resultados finales para poder sacar conclusiones relevantes. Por otro lado, se puede decir que, de algún modo, este proyecto plantea una redefinición del concepto de frontera lingüística, lo que invita a hacer reflexiones teóricas en este sentido.